

だ終りに臨み、法師が此處から東南三十里の地にまで迂回してハツダなる地名を世に知らせる程名高い遺跡を訪ふたと云ふ一事を述べて置かう。現在の村落は數多の塔の聳ゆる幾つかの大きな丘上にあるが、今その誇りとする所は、印度アフガニスタン國境地方の種族に對する勢力上本世紀の始めに政治的に相當重要な地位にあつた Moullah が此處に居たこと従つて其の墳墓のあることである。昔このハッダイシェリーフ Haddai-Sherif (一般に斯く呼ぶを好む)が宗教上八釜敷い處であつた其の名聲の幾分を、今此の新しい Moullah の遺跡がどういふ風にして此の土地に恢復させてゐるか、それを檢證するものも興味のあることではあるが、此處にも舊跡は頗る多いことではあるし、昔の巡禮でも輕信の餘り、既に巧に金錢を捲き上げられたものだと言ふ話のある塔(法師の記事を再讀せられよ)の遺跡などをも輕々しく推定することは矢張り差控へることにする。今言ふことの出来る一事はテツペ・カラーン Teppé-Kalân (天丘)附近でマッソンが試みた初回の調査に依つて、是等の宗教的建造物に施した裝飾の豊麗なことが示され、且つタキシラ附近の寺院から出る物と全然